

漢法苞徳塾資料	No. 004
区分	報告
タイトル	「医学の問題」を提起したもの
著者	八木素萌
作成日	1992.08

☆夏期合宿のテーマについて種々と考えていた丁度その頃に（6月中旬だったと思う）札幌の麻生病院（脳神経外科病院）ではナースたちが、チームを組んで植物人間の看護にチャレンジした。患者は植物人間から回復してリハビリテーションに入ったという映像が、NHK-TVで放映された。患者の応答を引き出そうと、家族の協力も得て、様々にコミュニケーションを試み続けたと言うのである。言わば常識を超えた努力の成功である。人の命とその存在と、そして治療や看護と言うものを深く考えさせる衝撃であった。

☆アメリカでのトリプトファン事件について～バイオ食品に対する規制の問題にからんで

昭和電工が1回の突然変異誘発と4回の遺伝子組み替え操作で作られた「トリプトファン生産菌」を用いて作った健康食品で、「米国での被害者1510人うち死者38人、ドイツ・フランスなど欧州での患者約100人、日本でも10人前後の患者がいると見られる」事件を引き起こした。「腕や足などから激しい痛みが起こり、赤く腫れ、同時に血液中の好酸球が異常に増える」好酸球増加・筋肉痛症候群（EMS）の発症事件で、81年にスペインで起きた油症に良く似た症候であり、原因物質として2種類が判明したが毒性が明らかな方の「フェニルアミノアラニン」は、スペイン油症の原因物質の1つの「フェニルアミノ・プロパンジオール」に近い化学構造で、これは「多量のトリプトファンとの相乗作用の公算がある」と言う。『科学朝日・9月号』の記事編集者は「作為的に突然変異や組み換えを起こした菌は、目的とする機能以外の部分でも変異や障害を起こしている可能性がある。その結果、特異な物質を生産する懸念があり、…」と記述している。

☆『セル・6月25日号』の記事では「人などで免疫システムの多様性をつくるのに重要な遺伝子と同じものがショウジョウバエにあることがわかった。…意外なことに、この遺伝子からつくられるたんぱく質は、神経系の発生と関連しており、その関係と起源が改めて問われている。…京都大学医学部の古川貴久らは、ショウジョウバエでも、この免疫グロブリンの組み換え認識配列結合たんぱく質と同じものがある…ことを発見した。その遺伝子が染色体上でどこにあるかを調べたところ、既知のヘアレス遺伝子の抑制遺伝子（ヘアレス遺伝子に変異があっても、正常な表現型を示すようにする遺伝子）であることがわかった。…」というのである。

☆もともと皮膚と神経系は外胚葉系のものであるが、間葉系の免疫細胞・白血球が表皮のケラチノサイトで完全に成熟して、その機能を完遂できるようになるのであり、発生学的にはもっとも分化度が低いということもできるマクロファージとの緊密にコミュニケーションしながら、免疫機能を完遂して行くことは判明していたのであるから、「さもあらなん」とも言うこともできようが、神経系と免疫系が極

めて緊密な調整関係にあるようだという事が、遺伝子レベルからも示唆されているものであろう。

これは、札幌の麻生病院での成果と無関係であろうか？

また、『魔弾の効用を超えて』を書いたB・ディクソンが、「難治」「不治」とされる病の場合には、メンタルな側面が非常に大きな意味を持っている事を示唆する例を、その著書に記述した事と、無関係であるのだろうか？

☆「ホリスティック医学会」が成立している。また、「サイコスوماتィック医学会」という名のものが生まれても不思議ではない。湯浅恭夫氏（桜美林大学教授・人間科学会副会長）は、ニーダムの考えとして「東洋医学の考え方は心身相関的〈サイコスوماتィック〉で全体的〈ホリスティック〉である、と言っている。」と紹介しているが、「タオイズム」として注目されているのは、西洋的な近代文明が招いている人間的荒廃からの脱出を求める西欧的な文明の危機を強く意識している傾向と、深く関連している。「ゼン」も「ヨガ」も、要するに「非西欧的で非近代的」な文明から「救い」が求められるかも知れないと感じて模索している「現代」と関連しているのだ。東洋医学の人間理解と治療医学を「心身相関的〈サイコスوماتィック〉で全体的〈ホリスティック〉」と特徴づけたのはニーダムであるとして、そのように表現しているのは「西欧的な言葉使い」にほかならないことを指摘して置く必要がある。

「ホリスティック」と言う時に「人身は三才において暮しているもの」と言う思想がキッチリと引き継がれているのであろうか？人は天地に拠って生をうけているが、それは先祖から受け継がれた命としてであり、その具体的・現実的な姿として父母の生命をうけて生れたのであり、食と呼吸と経穴での外界との交通とによって不断に宇宙と交通しながら生きて生活している。そのような生命の実在は成長壮老死のプロセスに過ぎず、死は生をうけた宇宙への回帰に過ぎない。寿に暮し寿に生きて寿に終る為に、養生があり医学がある。生まれ付き大きいなら大きいなりに、細いならば細いなりに、老いていれば老いているなりに、陰陽・気血・臓腑・経絡に平衡が行なわれていれば、寿である＝健康である、このように考えている。言いかえれば人身は開放系であって閉鎖系ではないと把握しているのである。この自然・世界・宇宙と人身との間に見られる統合性・融合性と、人身が開放系であると把握していることと、人身は高度に「整体的」〈現代中医学の表現〉＝「動態構造論の平衡性」あるいは「有機的立体的多層的な動態構造的平衡体」であると把握している事とは、一貫した認識として構成されているのである。「平衡を維持する事」「維持させるように関与できる具体的な仕組みを見出している事」が枢要な所である。「人間機械論的な医学」に対して「ホリスティックでサイコスوماتィックな医学」と称えて、東西を対比するのみでは本質を描き出していないのである。

自然の「フラクタル構造」が注目され、それが「カタストロフ」と実は相補的な関係、あるいは、相対的な構造の関係に在ると言う見地が成立して来ているのであり、「フラクタルとカタストロフ」とは同時に論じられなければならない。従って、医学的な対照の「ホリスティック」で「サイコスوماتィック」な構造であると見なす論理構成は、「フラクタルとカタストロフ」の構造において世界を把握する着想と、重なりあったものに見えるのである。「フラクタル」構造の姿を見せている運動には「ユラギ」が見られるが、その「ユラギ」は「 $1/f$ リズム」であると言う。この「ユラギ」に見られる

「フラクタル」性の乱れは、ある時点から拡大し始めて「乱れ」は次第に拡大する。そして遂に「カタストロフ」を迎えることになる。人の生理においては、「フラクタル」な循環の中に「 $1/f$ リズム」が見られる、これは一見不規則な「乱れ」である。その「乱れ」は時々大きい態様を見せて「フラクタル」な構造が破綻したように見える、しかし間もなく「フラクタル」な循環（ $1/f$ リズムを持った）構造は再構成されて回復する。健康な身体や回復力の強い身体にはこう言う面（フラクタルな $1/f$ を含んだ）のような状態、つまり「リズム」であり「乱れ」が見られる。然し、病む前はこの「リズム」「乱れ」が小さくなり減衰する、「死」の前には「リズム」「乱れ」が見られなくなる。つまり「死」はもはや「フラクタル」さを再構成する力を亡くした最終的な「カタストロフ」であり、最大の破綻である。